跟讀訓練應用於日語會話課的成效與展望（2）

－以文藻外語學院日本語文系的會話課為例－

文藻外語學院日本語文系助理教授
張汝秀

要旨

本研究的目的是為了能提昇學習者的日語溝通能力。故根據對文藻外語學院 95 學年度日本語文系首度實施會話小班教學所做的實際調查結果，在分析其問題點後，於本次會話課中導入口譯訓練時所進行的跟讀訓練，並檢驗其會話學習效果。

本研究採用行動研究的研究方法；實施了 3 次的問卷調查及 2 次的口頭能力測試，以期進行更準確、切實的學習效果檢驗。

根據本次的研究結果顯示，導入跟讀訓練對於加強日語的流暢度、發音、音調等以及喚起會話其它相關的問題意識上，都有顯著的效果。還有，也證實了對於提昇會話能力有著相當良好的效果。然而，對於會話時所必要的即時性、應對性可謂尚稱不足。

關鍵字：小班、跟讀、溝通能力、重音

The Result And Prospection in Applying Shadowing Training Into Japanese Conversation Class (2) -Using Wenzao Ursuline College of Languages , Department of Japanese as Model-

Chang Ju-Hsiu

Assistant Professor, Department of Japanese

ABSTRACT

The purpose of this research is to improve the ability of communication in Japanese's learners: According to the practical survey on conversation's small class teaching we have first done in Wenzao Ursuline College Of Languages, Department of Japanese, 2006 academic year, after analyze the critical point, we have decided to introduce shadowing training which is usually used in oral interpretation's training into conversation's class, moreover, to examine the efficiency of it.

This research was introduced with the research way of action research: Hoping to carry out more specific and accurate examinations of learning result, we have brought into practice for 3 times of questionnaire survey as well as 2 times of oral ability's survey.

According to the result of this research, introducing shadowing training into conversation class has obtained great effect in improving Japanese's fluency, pronunciation and sense of raising other conversational related issues. It also proved to have great effect on improving the ability of conversation. However, the necessary immediacy and applicability in conversation is still not enough.

Key Words: Small Class, Shadowing, Ability of Communication, Accent

シャドーイング訓練法を取り入れた日本語会話授業の効果と展望（2）

－文藻外語学院日本語文系の会話授業を例として－

張　汝秀
文藻外語学院日本語文系助理教授

要旨

本研究の目的は学習者のコミュニケーション能力を高めるために、文藻外語学院日本語文系が 95 学年度に初めて実施した小クラスでの会話授業への実態調査の結果を踏まえ、その問題点を分析した上で、通訳訓練法に取り入れられるシャドーイングを用いて授業検証を行い、その効果を考察しようとするのである。

本研究はアクションリサーチという研究方法を取り、３回のアンケート調査および２回の口頭能力測定を行い、より実証的かつ実践的に検証した。

今回の研究結果によると、シャドーイングの導入によって、日本語の流暢さ、発音、イントネーションなどの強化およびそれに関する会話への問題意識の喚起に顕著な効果があり、また会話能力の向上にもかなり効果的であることを実証することができた。しかし、会話内容に必要とされる即時性・対応性への育成がまだ十分ではないと言える。

キーワード：小クラス、シャドーイング、コミュニケーション能力、アクセント

一．はじめに

グローバル化時代の下で、各国間の頻繁な交流が一層活発となり、言語を使って相互の意思や感情、思考を伝達し合うというコミュニケーション上の異文化交流が不可欠な存在となった。この趨勢に応じて、国際理解の一環として、台湾でも外国語教育への推進に力を入れ、1997年から中等教育の第二外国語として日本語などを導入し、コミュニケーション能力のある人材を強く求めている。こうした社会的要請の下で、台湾の日本語教育は、いかなる対応策を取り、社会的要望に対応できるような語学人材を育成するかが、重要な課題となった。

しかし、日本語の学習時間が増すにつれて、会話能力の学習成果と他の三技能の差が更に大きく開いていることが、しばしば指摘されている。例えば、呉氏が「上級レベルの合格者が日本語の語彙、文法、文型、表現などを習得することによって相当な語学知識を積み上げ、聴解力を持っていても、その文法、読解力のレベルに等しい会話の運用力が身に付いている者はさほど多くない」[1]と、自らの教育現場の経験を語った。それは会話能力と他の三技能に比べれば、人と会話を交わすときの即時性、対応性が必要とされるため、会話能力がなかなか伸びないのが、無理もないことである。

また、これまでの会話授業を振り返ってみると、初、中級段階で行われている日本語の会話授業は丸暗記させる場合がかなり多いのが現状だと言える。更に、新井氏は「台湾における語学教育は書き言葉から話し言葉へという学習スタイルが既に定着している」[2]と台湾での日本語会話授業の実態を明言した。しかし、会話とは一方的な予測に基づいて発話するものではなく、話し相手の反応によって話の内容が展開され、会話の即時性、対応性が求められるのである。そこで、「書き言葉から話し言葉へ」という丸暗記の学習効果が限られているのが当然である。

したがって、日本語コミュニケーション能力の向上には、いかなる効果的な教育プログラムおよび新しい教授方法を開発すべきかが、当面の重要な課題である。そこで、通訳は高度な言語能力を要求され、異文化間コミュニケーションにおける情報処理の最前線と位置づけられるため、こうした通訳理論や技法から学習者のコミュニケーション能力の向上に、何らかの示唆

---

[1] 吳美嬅「初級段階におけるコミュニケーション重視の会話指導法－談話内容の豊富性を中心に－」『二〇〇七年日語教學國際會議論文集』 東吳大學日本語文學系　P. 125

[2] 新井芳子　『台湾人日本語学習者のコミュニケーション能力の向上に関する一考察ーその技法と可能性について』　東呉大学日本語文学系碩士班卒業論文　P. 16

を与えることができるのではないかと考える。つまり、通訳理論を日本語教育に導入することは、日本語会話の学習効果をいかに高めるかという課題を打開する糸口だと思われる。

これに関し、日本の場合は、1991 年から通訳学に関する総合研究への重要性を意識し、外国語教育（つまり、英語教育）への通訳教育の導入に着手し始めた。更に 2000 年（平成 12 年）12 月 8 日の第 22 期国語審議会答申で「国際社会に対応する日本語のあり方」という提案を審議し、日本語の国際化を進めようとする姿勢を見せ、世間の注目を集めた。答申の中で「言語による情報交流の必要性から見た通訳・翻訳の重要性」[3]にも言及し、日本語教育におけるコミュニケーションにかかわる言語能力の重要性を強調した。この提案はまさに画期的なものであり、従来の日本の通訳観に新たな認識の変革を迫るものであることが窺える。

しかし、日本の新しい通訳観の波及効果はまだ台湾にまで及んでいないのが現実である。王珠恵氏は「日本語教育者は通訳を語学教育の一環として受容れることが少なく、一概に通訳授業は技能の伝授だけだと思ってい」[4]ると指摘した。つまり、台湾では日本語教育と通訳に関する応用研究に力を入れる余地がまだ十分にあることを示している。したがって、コミュニケーション能力を高めるために、台湾における通訳観への意識改革は疑いもなく当面の課題である。同時に、通訳と日本語教育とをいかに結び付ければ、学習者のコミュニケーション能力の向上に効果的であるのか、というような研究・開発も極めて重要な課題である。

このように、コミュニケーションに必要とされる即時性、対応性などの問題を乗り越えるため、これまでの授業・学習スタイルを見直し、いかなる方策を取るべきかが、当面の重要な課題である。言い換えれば、堪能な日本語のコミュニケーション能力を持つ人材への育成には、今後の教室活動で、いかなるカリキュラム内容および教授法を取り組むべきかが、極めて重要な課題である。これに対し、文藻外語学院は他の大学と異なり、台湾で唯一の言語教育を中心に行い、専門的な外国語能力を持つ人材を育成するのが主なねらいであるため、新しい社会的要請の下で、いかなる対応策を取り、社会的要望に対応できるような語学人材を育成するかは、十分に注目に値すると思われる。

そこで、本研究では文藻外語学院日本語文系が 95 学年度に初めて実施した小クラスでの会話授業の実態調査の結果を踏まえ、その問題点を分析しながら、通訳訓練法に取り入れられる

---

[3] http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/12/kokugo/toushin/001217c.htm　2008 年 6 月 15 日　P.2
[4] 王珠恵著　『即戦力のある日本語学習法―通訳と認知』　2004 年　大新書局　P.146

シャドーイングを用いて授業検証を行い、その効果を考察しようとするのである。つまり、以上の社会背景と問題意識から、学生のコミュニケーション能力を強化するための効果的な指導法を模索する教育実践の一環として、今後の指導の参考とするために行なったものである。

二. 先行研究

通訳は異言語間コミュニケーションにおける情報処理の最前線にあるものだと言える。そこで、通訳理論や技法から学習者のコミュニケーション能力の向上に、何かの示唆を与えることができるのではないかと考えられる。これに関し、日本では、1991 年から通訳学に関する総合研究への重要性を意識し、「英語教育」における通訳教育の導入に着手し、その研究代表者である渡部昇一氏による報告書『外国語教育の一環としての通訳養成のための教育内容方法の開発に関する総合的研究』があった。更に、2000 年 12 月 8 日の第 22 期国語審議会答申では、通訳・翻訳はコミュニケーションにかかわる言語能力に重要な関連性があると明確に強調した。

そして、日本では第一外国語、いわゆる英語教育への研究・調査が続々と展開された。例えば、玉井健氏の「シャドーイングの効果と聴解プロセスにおける位置づけ」（1997）、『リスニング指導法としてのシャドーイングの効果に関する研究』（2005）は、シャドーイングの導入で、リスニング能力の向上を促進することを通して、シャドーイングの有効性を論じる研究である。また、瀧澤正己氏（2002）の「語学強化法としての通訳訓練法とその応用例」は通訳訓練法の中で語学学習に応用可能な訓練法を概観し、その英語学習の例を挙げたものである。

一方、越智美江氏（2005）の「高校における［通訳訓練法］を取り入れた言語教育の効果と展望」は高校（平成 2 年度より）の英語教育の現場での通訳訓練法を利用した授業の分析結果を通し、その運用能力を高める指導法を提案するものである。このような言語教育の分野だけではなく、通訳教育の分野も含める、いわゆる総合的研究は、日本語を外国語として対象外とされる日本では、ほとんど英語教育を対象として行われているのである。

とは言え、各国への日本語の推進にも、より効果的な教授法・学習法の研究は必要とされるため、日本語教育もその後に続き、これに関心を寄せた。例えば、望月通子氏（2006）の「シャドーイング法の日本語教育への応用を探る一学習者の日本語能力とシャドーイングの効果に対する学習者評価との関連性を中心に」は、シャドーイング訓練法の日本語教育への応用を

概説し、学習者の自己申告によるシャドーイングの効果を実証するものであるため、より具体的な実験・調査が欠けている。

これに対し、倉田久美子氏が「日本語シャドーイング遂行時の文の音韻・意味処理に及ぼす記憶容量と文脈性の影響」（2007）では、実験によって日本語シャドーイングが認知メカニズムを解明しようとするものである。シャドーイング訓練と日本語の会話能力の向上との関連性に関する研究･調査は行っていないのが現状である。日本語教育と通訳学に関する総合研究は、尚多くの研究余地が残されている。

一方、台湾の言語教育界では通訳学を単なる技能の伝授として認識し、それを単なる言語教育の中の一つの学習科目と見なしているため、日本語教育と通訳学の総合研究はかなり少ないと言える。現時点では単なる陳佩君氏（2006）の『日語教育的跟述應用–以聽力提升為中心–』という研究論文があり、それはシャドーイング訓練からリスニング力の向上に関する効果を考察するものであったが、会話能力の向上との関連研究ではない。

こうした台湾の現状に対し、鳥飼玖美子氏が「日本における通訳教育の可能性―英語教育の動向をふまえて」（1997）では、英語教育の一環として通訳訓練を行う傾向は日本では増加の一途をたどっていることを示した。そして、上述したように、日本語教育への関連研究はこれからも続々と進んでいくことが予想される。ところが、台湾の日本語教育の現場では通訳訓練法を利用した言語学習に関する研究は未だに極めて少ないのが実情である。

したがって、本研究は日本語教育に通訳教育の理論・技法を導入することによって、学習者の会話能力を強化するための効果的な教授法を模索する教育実践である。そして、これまでの日本語の会話授業に、通訳教育の基礎訓練法の一つであるシャドーイング訓練を取り入れ、学習者のコミュニケーション能力の向上を検証しようとするものである。また、これによって、新しいカリキュラム構成および教授法を開発するのを期する。

三．調査の目的

本研究は、学生の日本語のコミュニケーション能力を強化するために、シャドーイングの訓練手法を通じて効果的に行うという見解を、教育現場の実態に即しながら、アクションリサーチという形でより実証的かつ実践的に検証することを目的とする。

四．調査対象と調査期間

文藻外語学院日本語文系の四技二年 A 組（二年 A 組は筆記試験の測定によって、二年生の中で日本語の学力レベルが高いほうである）の中からランダムに選出した A グループ（32 名）を実験群とし、B グループ（22 名）を統制群として研究調査を行った。調査期間は 2007 年 9 月初旬から 2008 年 6 月末までの 10 ヶ月間であるが、その中で、1 ヶ月ぐらいの冬休みが入ったため、実際は 9 ヶ月間しかない。

五．　調査の概要

なるべく同じ条件で進行させるため、両グループとも原則として同一テキスト、同一授業内容を行い、また、授業担当の日本人教師と台湾人教師も中間テストの終了後に交替する。一方、A グループに対しては既定の授業内容のほかに毎週 1 時間のシャドーイングの測定を設け、シャドーイングの出来具合を確実に把握する。また、学生の確実なシャドーイングの練習を確保するために、毎週の測定の成績を平常点の計算に入れることを事前に A グループに伝える。シャドーイングの内容は主に日本語能力検定 2 級（聴解）の会話文を素材とする。これによって、学生の会話能力および日本語能力検定 2 級（聴解）への対応力を高めることも図っている。

（一）実施方法

シャドーイング練習の会話文への理解度を把握するため、A グループの学生達は毎週、e-learning からダウンロードした新しい会話文を聞きながら、復唱する。その正解は次週に検討する。また、シャドーイング練習の場合、学生達はダウンロードした会話文を何回も復唱し、熟練したら自分の復唱内容を録音し、その音声ファイルを e-learning にアップロードしてから、その週の宿題の提出が完了となる。

こうした会話文への模倣・復誦によって、モデル音声の貯蔵、音韻ループの定着、自然な外国語の流暢さの定着などの言語能力を育てることを期する。また、A グループの学生達は毎週、半分ぐらい交替で 1 時間のシャドーイング測定を受けなければならないのが条件である。測定基準は発音の正しさ、内容の正確さ、

流暢さという三項目で決める。もちろん、教師は毎週のシャドーイングの内容をかなり熟練しなければいけないのが原則である。これによって、学生の確実な練習および学習状況を把握しようとするのである。

（二）調査方法

本研究では三回のアンケート調査を行った。まず、学生の基本データを把握するため、A･B 両グループとも初回の授業で事前のアンケート調査を行った。次に、前期の授業（4ヵ月）が終了した時点で、シャドーイング訓練に関する学生の意見・状況を把握するため、A･B 両グループともそれぞれアンケート調査を行った。最後、後期の 4ヵ月後（最後の授業）、この8ヶ月ぐらいのシャドーイング訓練から感じた問題点を明らかにするため、A グループだけにアンケート調査を行った。これによって、学生達の会話能力の問題点を分析しようとするのである。

また、シャドーイング訓練の学習効果を検証するため、2回の口頭能力の測定を行った。本研究は一定の評価を得ている OPI（Oral Proficiency Interview）の測定理論を採用した。確かに、OPI の測定は本来面接者が受験者と直接対話するという形で実施されるものであるが、本研究では限られた時間内で大人数の測定を行うため、庄司恵雄等のメディア方式による口頭能力測定に信頼性があるという研究報告[5]を踏まえて、メディア方式の測定方式を採用することにしたのである。

測定方法とは、前もって録音した質問内容をコンピューターにより測定者に提示し、口頭能力測定を行い、測定終了後、録音した被験者の発話標本とそれを文字化した内容によって被験者の口頭能力を判定するというメディア方式の測定である。そして、一回目の測定は A･B 両グループの事前の口頭能力の測定として初回授業の前に行った。二回目は後期授業の最後の授業で行った。この二回の測定によって、シャドーイング訓練の学習効果を検証しようとするのである。

つまり、本研究はより客観的な口頭能力測定と自己申告による学習者評価を通して、学習者のシャドーイング訓練による日本語会話の学習効果を検証しようとするの

[5] 庄司恵雄等　「大規模口頭能力試験における分析的評価の試み」　『日本語教育 116 号』　日本語教育学会　2003　P.117

である。この研究結果に基づいて、今後の授業指導の参考としようと考える。

六．調査結果の分析と考察

（一）シャドーイング訓練の効果

今回、シャドーイング訓練の導入は A グループだけであるが、初回授業の事前、前期授業の終了および後期授業の終了という時期に三回のアンケート調査を行った。それと同時に、口頭能力の測定も初回授業の前と後期授業の最後という時期に二回に分けて行った。それで、今回のアンケート調査によれば、シャドーイング訓練の導入によって会話の学習効果が現れると感じるのは、日本語のスピードについていけることが 38%、リスニングがよくなったことが 23%、自分の発音とアクセントに注意することが 18%、前より日本語がしゃべられることが 7%、また日本語の発音がよくなることが 5%という順番となっている。

こうした調査結果からシャドーイング訓練の導入によって、日本語の流暢さ、発音、イントネーションなどの強化およびそれに関する問題意識の喚起に効果があるということが示された。また、シャドーイングの導入に関する意見調査では A グループは半分以上（非常に賛成は 25%、賛成は 31%、意見なしは 28%）が賛成するという結果からみれば、過半数の人はシャドーイング訓練の学習効果に肯定的な態度を示していると言えよう。

このアンケート調査に関するより詳しい論述は既に発表済みの拙論（「シャドーイング訓練法を取り入れた日本語会話授業の効果と展望について」『2008 第五届海峡両岸外語教学研討会論文集』）で論じたので、ご参照下さい。そして、口頭能力測定の調査結果について、まず A 組の事前測定と事後測定の結果の分析と考察を行い、次に A･B 両グループのそれぞれの事前測定と事後測定の結果を比較・分析しながら、議論を進めていく。

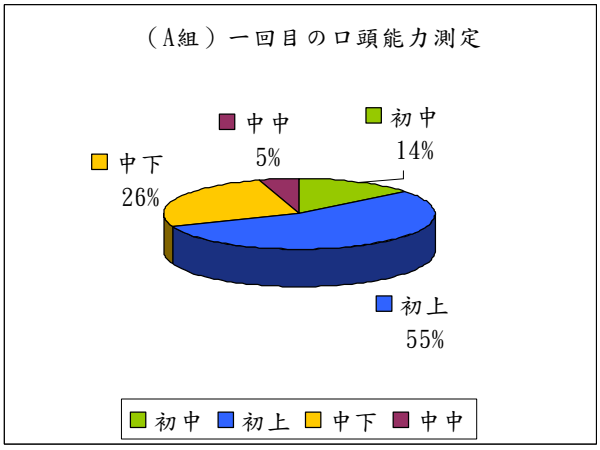
１．A 組（A･B グループ）の事前測定と事後測定の結果について

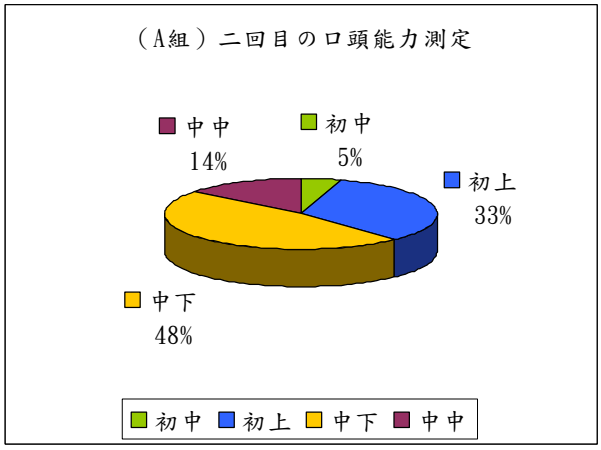
A･B グループにおける事前測定と事後測定の結果は図Ｉの通りである。一回目の口頭能力測定は初上レベル（55%）、中下レベル（26%）、初中レベル（14%）、中中レベル（5%）という順番となっている。最も多いのは半分以上の人数を占めている初上レベルである。これに対し、二回目の測定は中下レベル（48%）、初上レベル（33%）、中中レベル（14%）と初中レベル（5%）という結果となり、最も多いのは半分近くの人数を占めている中下レベルである。また、一回

目に比べ、中下レベルでは22%、中中レベルでは9%の学生数が増えたことを示した。

言い換えれば、一回目と二回目の測定を比較すれば、初中レベルは9%、初上レベルは22%が減り、中下レベルは22%、中中レベルは9%の学生数が増えたことになり、このような実態から、学生全体の会話能力がだいぶ上がったことが分かった。これは、ある意味から言えば、会話授業の学習効果は確かに実証できたが、シャドーイング訓練の実際効果はまだ断言できないという段階にとどまっているため、次の A·B グループの測定比較から見てみよう。

図Ⅰ　A組：一回目と二回目の口頭能力測定



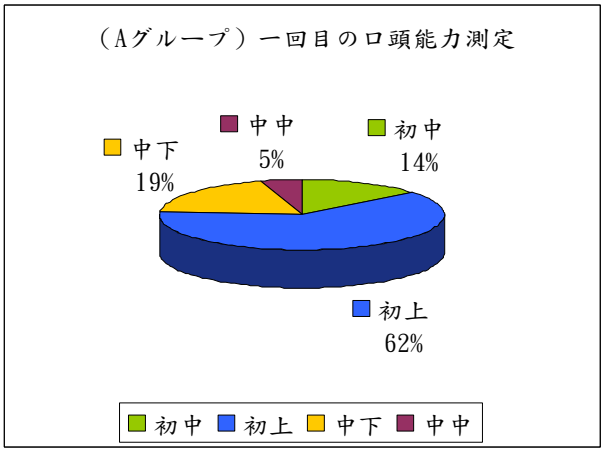


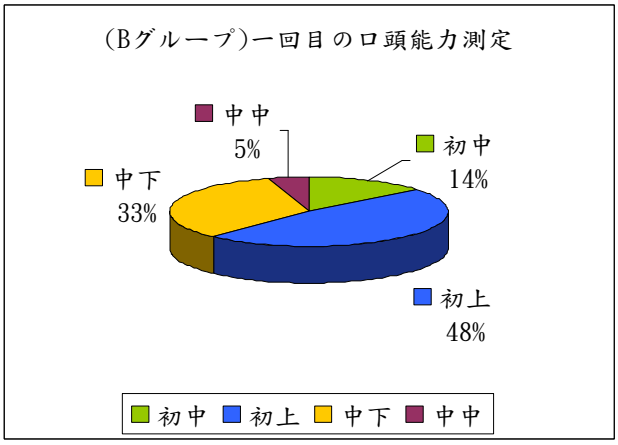
2．A·B グループにおける各自の測定比較について

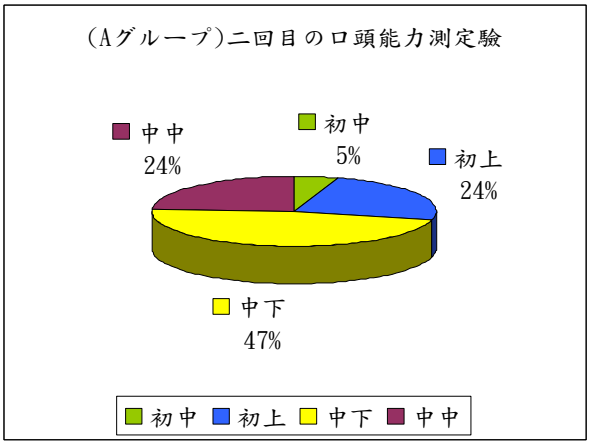
A グループの一回目測定と二回目測定は図Ⅱに示した通りである。初上レベルは62%、中下レベルは19%、初中レベルは14%、中中レベルは5%という A グループの一回目の測定結果に対し、B グループの一回目の測定結果は、初上レベル（48%）、中下レベル（33%）、初中レベル（14%）、中中レベル（5%）という順序になっているため、初上レベルと中下レベルの割合から見れば、シャドーイング訓練を実施する前の B グループの会話能力は A グループより高いということが窺える。

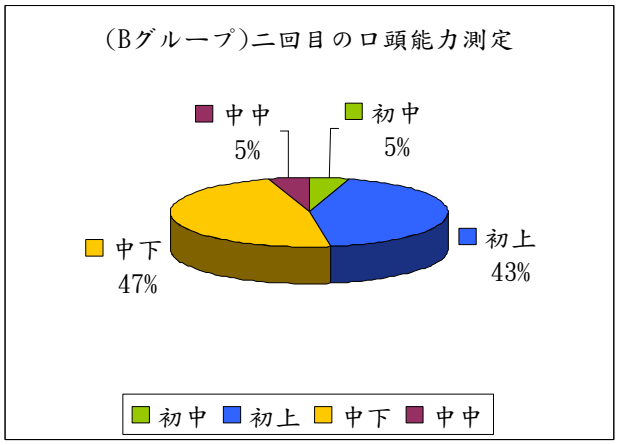
一方、図Ⅱに示したように、シャドーイング訓練を実施した後の A グループの二回目の測定結果に、中下レベルは47%、中中レベルは23%、初上レベルは24%、初中レベルは5%が示され、中で最も多く占めているのは47%の中下レベルと23%の中中レベルである。それをシャドーイング訓練を実施する前の一回目の測定結果と比べれば、二回目の測定に初

図Ⅱ A ･B グループ：一回目と二回目の口頭能力測定

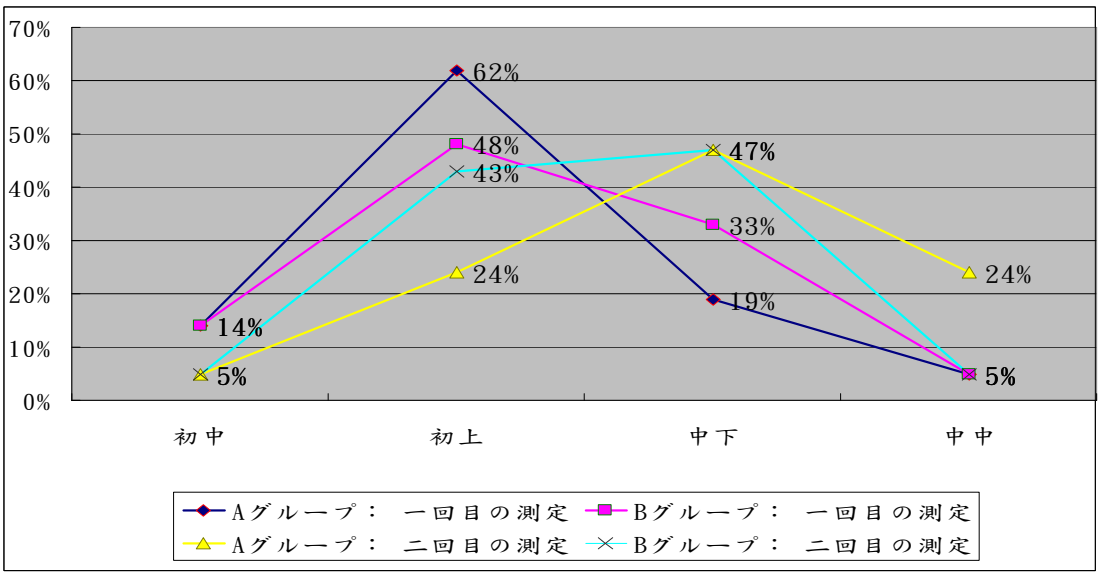








図Ⅲ　A・B グループの比較



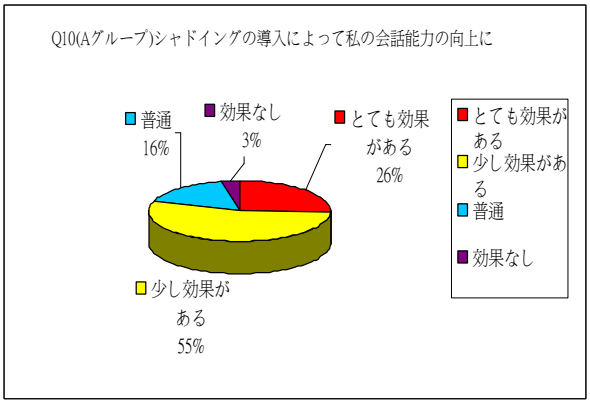
中レベルと初上レベルがかなり減り、中下レベルと中中レベルに達した学生が相当増えたことが明らかである（図Ⅲ）。言い換えれば、シャドーイング訓練を実施した後のAグループの会話能力が実施する前よりだいぶ向上したということが窺える。

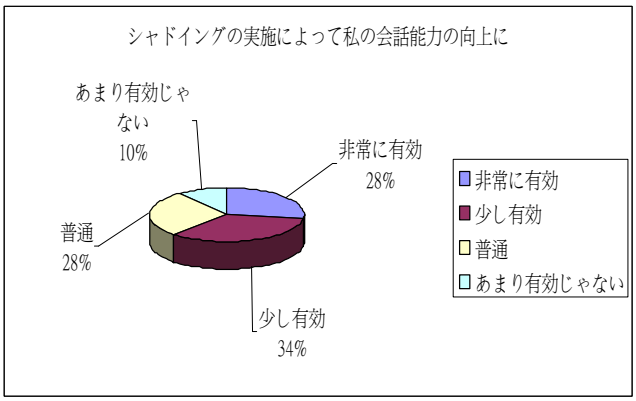
それをアンケート調査から見てみれば、疑いもなく、シャドーイングの導入によって効果があると思う人は、二回のアンケート調査（一回目は81%、二回目は62%）で、いずれも60%以上を超えた。確かに、学習効果は一回目の81%から二回目の62%に下がったように見えるが、これは既に拙論で論じたように、「この状況はシャドーイングが短期間で学習効果がすぐ現れるというこれまで論じてきた先行研究の結果に一致していると言える」[6]。これはある意味ではシャドーイング訓練の限界とも考えられる。その外に、シャドーイングの練習状況によって、モデル音声の難易度を徐々にレベルアップすることも重要な留意点である。

これに対し、Bグループの一回目測定と二回目測定は、図Ⅱに示したように、それぞれ初上レベル（48%）、中下レベル（33%）、初中レベル（14%）、中中レベル（5%）、と中下レベル（47%）、初上レベル（43%）、初中レベル（5%）、中中レベル（5%）の順番となっている。そして、Bグループの二回目測定は初上レベルの人数がやや減り、中下レベルの人数が14%も増えたことが分かった。すると、初上レベルと中下レベルの順番が変わり、Bグループの会話能力の向上を示したが、その進展の著しさはAグループほどではないのが、明白である。

図Ⅳ　シャドーイング訓練と会話能力の向上について

①2回目のアンケート調査（Aグループだけ）　②3回目のアンケート調査（Aグループ）





[6]張汝秀　「シャドーイング訓練法を取り入れた日本語会話授業の効果と展望について」『2008第五屆海峡両岸外語教学研討会論文集』　文藻外語学院　P. 420

要するに、最初、レベル的に低いほうの A グループは、シャドーイング訓練の実施によって、会話能力がだいぶ伸び、更に B グループを超えていたことが明らかである（図Ⅲ）。これを学習者の自己申告から見れば、シャドーイング訓練の有効性への確証も得られる。例えば、シャドーイングの導入によって、会話能力の向上に効果があるかどうかという調査では、A グループは効果があると思う人は、いずれも 60%以上（一回目：81%；二回目：62%）を超えた（図Ⅳ）。これによって、シャドーイング訓練の導入は会話能力の向上に効果的であることを実証することができた。

（二）シャドーイングの限界

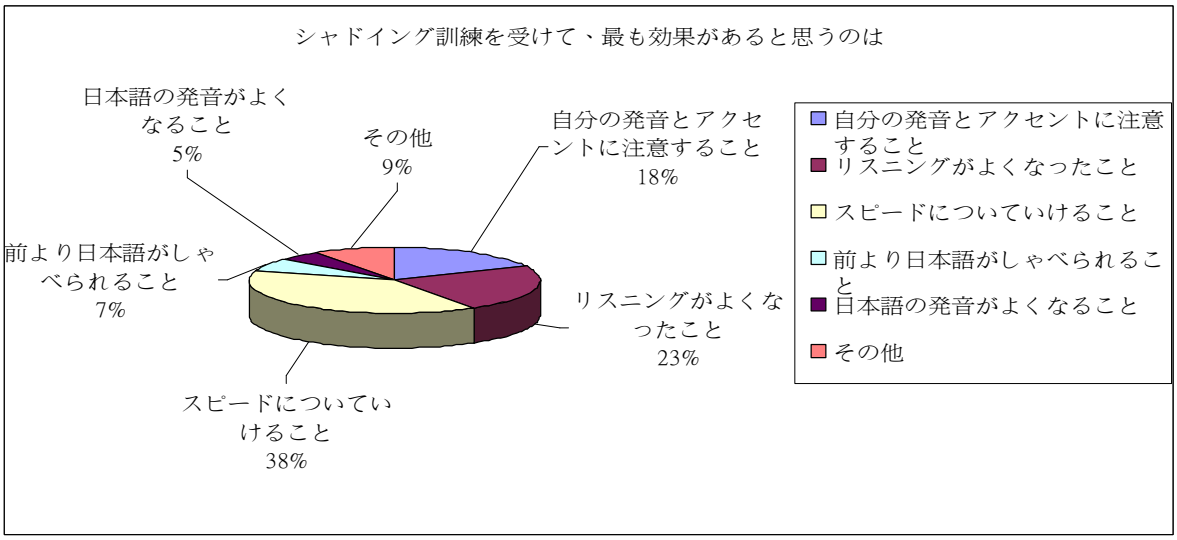
上述したように、今回の口頭能力測定の結果では、A グループは B グループより会話の学習効果を大いに収めたことが、既に明らかになった。しかし、シャドーイングとは、聞き取った内容のすぐ後に口頭で正確にまねて、影のようについていくことである。そのため、シャドーイングの訓練さえすれば、果たして会話能力低下の問題をすべて解決することができるのであろうか。

今回のアンケート調査でシャドーイング訓練の導入によって会話の学習効果が現れると感じる順番について、日本語のスピードについていけることが 38%、リスニングがよくなったことが 23%、自分の発音とアクセントに注意することが 18%、前より日本語がしゃべられることが 7%の、また日本語の発音がよくなることが 5%という結果となっている（図Ⅴ）。これに対して、シャドーイング練習のプロセスで、難しいと思われている場合は、モデル音声のスピードについていけないこと（43%）、正確に復唱すること（33%）、聞きながら復唱すること（13%）、日本語を聞き取れること（9%）という順番である（図Ⅵ）。

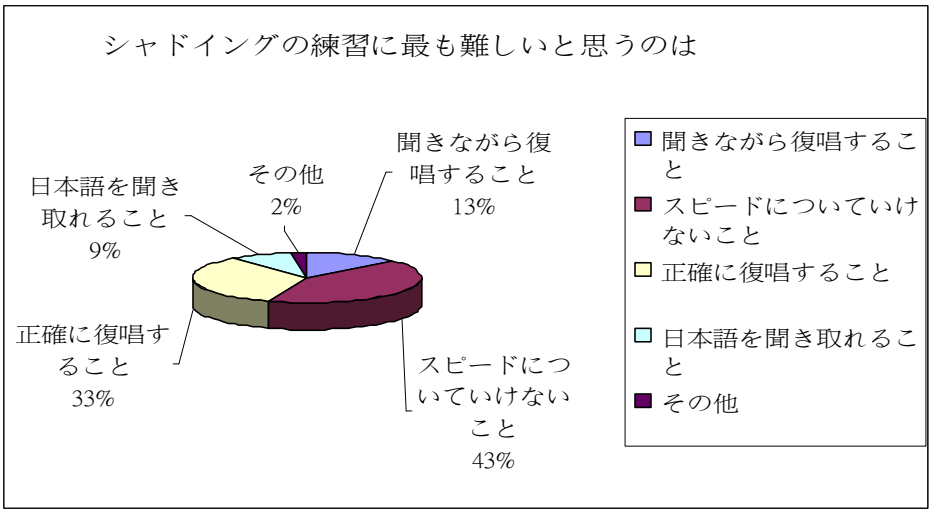
このように、ここでいう学習効果は、「前より日本語がしゃべられること」以外に、「スピードについていけること」にせよ、「リスニングがよくなったこと」にせよ、いずれもより速く音にするという復唱技術、およびイントネーションやアクセントなどのプロソディ認識技術の向上であり、あくまでも音声認知のほうに焦点を当てるものである。したがって、言語プロソディ（日本語を聞く耳と発音を鍛える）の向上以外にも、多くのしゃべる機会を提供し、舌が回らない現象を防ぐという学習効果は、今回の口頭能力測定で実証されたのである。

それに、会話力の向上にリスニング力はその付随的なものであるから、シャドーイングの音

図Ⅴ　シャドーイング訓練から最も効果があるところ



図Ⅵ　シャドーイング練習の難しいところ



声認知は、リスニング力の向上を助けると同時に、会話力の向上にも幾らか役立つと考えられる。とはいえ、シャドーイングは、入力音声を正確に再現することを目的とするものであり、その内容の意味への理解を追及するものではないため、情報理解の養成に限界があると考えられる。

それで、ヨーロッパではシャドーイングを機械的な繰り返しだと考え、情報把握力の養成を妨げるという批判的な意見があった。しかし、これに対し、玉井氏は「学習者がシャドーイン

グをする際に意味を取らない、ということでは決してない」[7]と考え、さらに「シャドーイングは高度に認知的な行為であり、決して機械的な行為ではない」[8]と反論した。それは、「内語発声を意識的に有声化して行うのがシャドーイングである。シャドーイングでは入力音声の後追いをしながら、正確に反復してゆくが、このリアルタイムでの瞬間的な反復行為が学習者の内語発生技術を高め、結果的により多くの情報を意味理解処理にまわすことが可能になる」[9]と考えたからである。

しかし、入力音声を早口に内語化し、復唱するとき、そのスピートと正確さを追求しようとするため、情報への理解力が助長されることが可能であるといっても、その情報理解への助けはやはり限られると考えられる。したがって、今回の研究調査で、A グループの学生達にモデル音声の内容を理解させてから復唱させるのは、少しでも意味理解への助けになるのをねらっているからである。

また、会話力の育成には、音声認知の能力以外にも、語彙・文法・音韻・一般的知識などの知識面の能力も必要である。簡単に言えば、会話力は音声認知の能力だけでなく、意味理解の能力も欠かせない。ただし、この意味理解の程度に至るには、音韻パターンの分析、語彙認識、文脈分析、意味分析などの能力を前提として備えなければならない。つまり、意味理解の段階に至るにはまだたくさんのレベルがある。したがって、今回の調査で、前より日本語がしゃべられると感じた学生達は僅か 7%しかないという結果があった。

言い換えれば、シャドーイング訓練は内容の意味理解を重視するリスニング訓練と違って、意識的に声に出して、すべての内容を再生しようとすることから、意味理解の向上が期待できるが、意味の把握そのものは主な目的ではないため、最終的な意味理解の段階に入っていないという意味である。したがって、シャドーイングには、文法や語彙などの言語知識を短期間に増やす効果はあまり期待できない限界がある。

会話が自分でメッセージを作って発信していくのに対し、シャドーイングの場合は発信しているメッセージは発話者のものではなくて、強制的に入れられるものである。換言すれば、スピーキングとシャドーイングは見た目では同じ Output の形であるが、実際は異なる性格を持っている。要するに、シャドーイングは、模倣と復唱という繰り返しの

[7] 玉井健　「シャドーイングの背景理論と評価法」　『シャドーイングの応用研究』　P.4
[8] 同上 P.1
[9] 同上 P.2

動作によって、耳と口が最大限に活用されるが、強制的にメッセージを入れられるという点から見れば、シャドーイングには話し相手の反応によって話の内容が進んだり、変わったりするという会話時の即時性、対応性が欠けているという限界が窺える。

したがって、シャドーイングはプロソディへの定着、口の動き、集中力のアップなどの面にかなり効果があって、リスニングと会話力の向上に貢献があると考えられるが、会話に求められる言語知識の増加および会話時の即時性、対応性に限界があると言わざるを得ない。

七．まとめ

本研究は文藻外語学院日本語文系が95学年度に実施した小クラスの会話授業への実態調査の結果から、その問題点を解決するため、96学年度の会話授業におけるシャドーイング訓練の導入によって、学生のコミュニケーション能力強化のための効果的な指導法を模索する教育実践の一環である。そして、今回の研究結果によれば、アンケート調査から、日本語の流暢さ、発音、イントネーションなどの強化およびそれに関する問題意識の喚起に顕著な効果があり、また、口頭能力測定から会話能力の向上に相当な実効があることも実証された。

言い換えれば、会話授業にシャドーイング訓練の導入によって、結果的にコミュニケーション能力のアップにかなりの成果があることが分かった。この研究結果は、これまで論じてきたシャドーイングの効果におけるスピーキング能力の向上に有効であるという論説を十分に支持するものである。今回の調査で、スピーキング能力の基礎となる日本語の発音、流暢さ、話し言葉などの要素およびコミュニケーション能力は、シャドーイングの訓練によって強化されることが確認できた。

一方、モデル音声を正確に復唱するため、かなりの時間と体力がかかり、大変な作業だと言えるのに、アンケート調査ではシャドーイング訓練の導入によって、シャドーイング訓練への高い関心・意欲を持つようになり、更に日本語学習への興味をそそったという多くの回答は、今回の実施に予測外の成果であり、大きな意義を与えたと言える。そして、こうしたシャドーイングの訓練は、コミュニケーション能力の育成に積極的な効果があることが明らかである。

しかし、シャドーイング訓練は、会話に必要とされる理解力への助長、言語知識の増加および即時性・対応性への育成に限界がある。つまり、シャドーイングはメッセージの正確な

再現を目的とするものなので、文法や語彙などの言語知識を短期間に増やす効果はあまり期待できず、また、会話のように自分からメッセージを作って発信していくのではなく、強制的にメッセージを入れられるため、会話時の即時性、対応性に限界があるのである。

とは言え、筆者が 2007 年の研究報告で既に指摘[10]したように、文藻の日本語会話授業で人数（50 名以上）が多くて筆記試験がよく採用されたため、学生の会話チャンスが減り、会話の学習成果がなかなか上がらないという問題は、口が最大限に活用されるシャドーイングの訓練によって、ある程度の改善ができると思われる。また、シャドーイング訓練の導入によって、会話の授業・学習形態はこれまでの「書き言葉から話し言葉へ」というのではなく、話し言葉からアプローチするという学習スタイルに向かって一歩進んだと感じた。

それに、今回で実施されていた会話授業の形態は、2007 年の研究報告[11]で学習者の自立的な活動を通して会話能力を身につけるという最も有効なコミュニカティブ・アプローチの教授法であり、その週置きに行われる A・B グループのロール・プレイの実際情況によると、A グループは B グループよりもだいぶ積極的・活発的であるという点から、コミュニカティブ・アプローチの教授法は会話時の即時性・対応性への向上に効果が現れたと言える。

実はシャドーイングの訓練法は通訳養成の世界では早くから既に行われた。筆者がそれを会話の授業に応用しようと思ったのも、通訳訓練を通じてその効果を実感したからである。今後、会話時の即時性・対応性への能力を向上させるため、新しい発想に基づいた会話授業の指導法を導入しなければならない時にきていると言えよう。

---

[10] 張汝秀　「[会話の小クラス]の実施実態とカリキュラム編成に関する研究調査」　『文藻外語学院 96 年度教師専題研究発表暨研討会論文集』　2007 年　文藻外語学院　P. 97

[11] 同上　P. 97

参考文献

1・ 新井芳子（2000） 『台湾人日本語学習者のコミュニケーション能力の向上に関する一考察ーその技法と可能性について』 東呉大学日本語文学系碩士学位論文

2・ 陳佩君（2006） 『日語教育的跟述應用 -以聽力提升為中心-』 國立高雄第一科技大學應用日語所碩士学位論文

3・ 牧野成一ほか(2001) 『ACTFL-OPI 入門: 日本語学習者の「話す力」を客観的に測る』 アルク

4・ 山内博之著（2005） 『OPI の考え方に基づいた日本語教授法 ： 話す能力を高めるために』 ひつじ書房

5・ 王珠恵著（2004） 『即戦力のある日本語学習法―通訳と認知』 大新書局

6・ 鄭婷婷（2002） 「進んだ段階における会話教育―読解力指導を中心にして―」 『中日文化』第 21 号 pp. 27-46

7・ 玉井健（1997） 「シャドーイングの効果と聴解プロセスにおける位置づけ」 『時事英語学研究』第 36 号 pp. 105-116

8・ 玉井健（1998） 「シャドーイングの背景理論と評価法」 『シャドーイングの応用研究』 pp. 1-19

9・ 玉井健（2002） 「リスニング力向上におけるシャドーイングの効果について」 『通訳研究』第 2 号 pp. 178-192

10・玉井健（2002） 「シャドーイングは万能薬なのか」 『英語教育』2 月号 大修館。

11・望月通子（2006） 「シャドーイング法の日本語教育への応用を探る一学習者の日本語能力とシャドーイングの効果に対する学習者評価との関連性を中心に」 『視聴覚教育』第 29 号 関西大学 pp. 37-53

12・石田久美子・平井明代（1998） 「シャドーイング指導上の留意点」 『シャドーイングの応用研究』 pp. 29-35

13・倉田久美子（2007） 「日本語シャドーイング遂行時の文の音韻・意味処理に及ぼす記憶容量と文脈性の影響」 『2007 年国際学術研討会論文』 国立台中技術学院応用日語系 pp. 125-138

14・笠原多恵子（1998） 「シャドーイング時の誤った発話のタイプについての考察」 『シ

ャドーイングの応用研究』　pp. 47-61

15・鵜飼玖美子（1997）　「日本における通訳教育の可能性―英語教育の動向をふまえて」『通訳理論研究』第 13 号　通訳理論研究会　pp. 39-52

16・鵜飼玖美子（2001）　「第 22 期国語審議会答申に見る通訳および通訳教育」　『通訳研究』第 1 号　日本通訳学会　pp. 126-135

17・染谷泰正（1996）　「通訳訓練手法とその一般語学学習への応用について」　『通訳理論研究』第 11 号　通訳理論研究会　pp. 27-44

18・田中深雪（2004）　「[通訳訓練法]を利用した大学での英語教育の実際と問題点」　『通訳研究』第 4 号　pp. 63-82

19・奥山澄夫（2004）　「実践的コミュニケーション能力を高めるために―通訳訓練法を用いて―」　神奈川県立総合教育センター長期研修員研究報告　pp. 61-64

20・瀧澤正己（2002）　「語学強化法としての通訳訓練法とその応用例」　『北陸大学紀要』第 26 号　pp. 63-72

21・呉美嬅（2007）　「初級段階におけるコミュニケーション重視の会話指導法－談話内容の豊富性を中心に－」　『二〇〇七年日語教学國際會議論文集』　東呉大学日本語文学系　pp. 125-139

22・孫寅華（2001）　「大学に日文系における会話授業の問題点及び改善にあたって」　『銘伝日本語教育』　pp. 255-258

23・王珠恵（2002）　「応用科学技術大学における通訳授業の考察」　『通訳研究』　第 2 号　pp. 145-160

24・庄司恵雄・青山真子・伊東祐郎・迫田久美子・野口裕之・春原憲一郎・広利正代（2003）「大規模口頭能力試験における分析的評価の試み」　『日本語教育 116 号』　日本語教育学会　pp. 109-118

25・庄司恵雄・青山真子・伊東祐郎・迫田久美子・野口裕之・春原憲一郎・広利正代（2004）「大規模口頭能力試験における分析的評価の試み」　『日本語教育 122 号』　日本語教育学会　pp. 42-51

26・張汝秀（2007）　「[会話の小クラス]の実施実態とカリキュラム編成に関する研究調査」『文藻外語学院 96 年度教師専題研究発表暨研討会論文集』　文藻外語学院　pp. 89-106

27・張汝秀（2008）　「シャドーイング訓練法を取り入れた日本語会話授業の効果と展望について－文藻外語学院日本語文系の会話授業を例として－」　『第五届海峡両岸外語教学研討会論文集』　文藻外語学院　pp.415-430

28・http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/12/kokugo/toushin/001217c.htm　2008 年 6 月 15 日。